

出品作品リスト

No	作品名	作者名・产地	時代世紀	品質	法量 (cm)	コレクション
1	积迦三尊図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦66.6 横23.7	石村コレクション
2	布袋図	円山応挙 (1733-1795)	江戸時代 天明6年(1786)	紙本墨画	縦105.2 横26.5	太田コレクション
3	三福神図	英一蝶(1652-1724)	江戸時代 18世紀	絹本着色	縦32.7 横51.7	黒田資料
4	寒山拾得図	祥啓(16世紀)	室町時代 16世紀	紙本墨画	縦80.0 横31.5(各)	博多百年蔵 コレクション
5	花鳥図	円山応挙 (1733-1795)	江戸時代 安永9年(1780)	絹本着色	縦104.0 横35.7	太田コレクション
6	鶏に藤図	円山応瑞 (1766-1829)	江戸時代 19世紀	絹本着色	縦119.0 横56.0	黒田資料
7	鷹図	尾形探香 (1812-1868)	江戸時代 19世紀	紙本着色	縦121.7 横71.5	黒田資料
8	群蛙図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦25.0 横49.2	九州大学文学部蔵
9	猫の恋図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦28.5 横34.5	九州大学文学部蔵
10	異代同戯図巻	狩野昌運 (1637-1702)	江戸時代 17世紀	紙本着色	縦28.6 横1334.8	
11	人物図	狩野探常 (1706-1756)	江戸時代 18世紀	絹本着色	縦124.2 横45.9	太田コレクション
12	林和靖図	宗淵(生没年不詳)	室町時代 15-16世紀	紙本墨画	縦68.0 横36.0	松永コレクション
13	○ 韋馱天図	伝・牧谿(13世紀)	南宋時代	絹本着色	縦99.2 横42.8	松永コレクション
14	觀世音菩薩図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	絹本着色	縦51.5 横15.9	石村コレクション
15	福禄寿図	土佐光貞 (1738-1806)	江戸時代	絹本着色	縦121.3 横36.1	太田コレクション
16	琴高仙人図	狩野永徳<高信> (1740-1794)	江戸時代 18世紀	絹本着色	縦102.6 横41.1	黒田資料
17	人麿図	狩野安信 (1614-1685)	江戸時代 17世紀	絹本着色淡彩	縦109.3 横48.7	黒田資料
18	天神図	仙厓義梵	江戸時代 19世紀	絹本着色	縦99.4 横28.6	九州大学文学部蔵
19	張果老図	狩野探幽 (1602-1674)	江戸時代 延宝2年(1674)	絹本着色淡彩	縦107.3 横47.1	黒田資料
20	蜆子和尚図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 文政3年(1820)	紙本墨画	縦119.8 横42.5	三宅コレクション
21	豊干禪師・寒山拾得図	伝・狩野元信 (1476-1559)	室町時代 16世紀	紙本墨画	縦56.0 横110.0(各)	太田コレクション
22	織部木菴香炉	美濃焼	桃山時代 17世紀	陶器	高16.3 胴径9.5	松永コレクション
23	鳩形香合	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	陶器	高4.7 幅3.1 長4.8	小西コレクション
24	織部香茶碗 銘「浜千鳥」	美濃焼	桃山時代 17世紀	陶器	高8.3 口径14.6	松永コレクション
25	掛分割高台香茶碗	高取焼 内ヶ磯窯	江戸時代 17世紀	陶器	高7.0 口径14.1	
26	老人六歌仙図屏風	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦100.5 横30.6(各紙)	
27	南泉斬猫図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦67.4 横28.8	石村コレクション
28	五徳図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦95.8 横28.2	小西コレクション
29	すす玉名人図	仙厓義梵 (1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦80.2 横31.8	小西コレクション



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

遊びと笑いの日本美術

会期 2021年9月14日(火)-11月14日(日)

会場 古美術企画展示室



出品No.10 狩野昌運筆《異代同戯図巻》(部分)

日本美術は遊び心を感じさせる作品や思わず笑ってしまうような作品など「ツッコミどころ」にあふれています。いつもはスルーしてしまいがちですが、本展ではそれらに真面目にツッコミを入れてみたいと思います。「作品を笑うのは作者に失礼?」いえいえ、決してそんなことはないと思います。案外作った人たちも、みんなに楽しんでほしいと思っていたのかもしれません。いつもより少し肩の力を抜いてお楽しみください。

(学芸員 宮田太樹)

1章 笑う神仏

本章で紹介するのは、神仏、つまり宗教画です。厳肅さが求められることが多い祈りの場は笑いとは無縁と考える向きがあるかもしれません、そんなことはありません。例えば《釈迦三尊図》(作品1)に描かれた諸尊は伏し目がちの穏やかな表情で口元にはうっすらと笑みを浮かべているように見えます。そもそも神仏には、人智を超えたカリスマ性だけでなく、苦しむ人びとの心に寄り添う親しみやすさも求められます。本作は後者により重きをおいていると考えてよいでしょう。人びとに幸福をもたらす福神(作品3)はこうした親しみやすい神仏の代表例です。

あるいは、禅宗の世界における散聖(世俗を捨てた聖人)の多くも笑みを浮かべた姿であらわされます。七福神の一人でもある布袋(作品2)は、中国の実在の人物がモデルといわれます。生活道具の一式を袋に入れ各地を放浪する生活を送っていました。子どものような純粋さでいつも笑っていたといい、その天真爛漫な姿が禅の心をあらわすとされます。

一方、寒山拾得(作品4)も実在の人物がモデルといわれていますが、その笑い方は布袋と比べると幾分気味悪く感じられます。禅宗では、日常から逸脱した行為によって人びとの常識を打ちこわし覚醒させることなどがしばしば行われます。ですから、寒山拾得の気味の悪い笑いは、彼らが常識を超えた聖なる存在であることを象徴していると考えられるのです。

2章 生き物へのまなざし

生き物を主題とした絵画は日本美術の主要なジャンルの1つです。これらの中には武勇や吉祥など、象徴的な意味が読み取れそうなもの(作品6、7)もあれば、気軽に飾って楽しむのに相応しいもの(作品5)など様々です。こうした作品を生み出す原動力となつたのが、私たちのもつ動物への愛着であったことは申し上げるまでもないでしょう。

一方、愛らしい動物の姿を描きながら、風刺のきいた作品もあります。例えば、《群蛙図》(作品8)を見てみましょう。川岸で足を揃えて行儀よく並ぶカエルたち。その姿は道場で坐禅を組む禅僧を思わせます。ただ、よく見るとカエルの中には目を閉じて居眠りをしているものもちらほら。さらに贊文には「坐禅するだけで仏になれるならカエルはとっくに仏になっている」と強烈な一言。本図は、カエルの姿を通して形だけの坐禅を厳しく戒めているのです。ネコの鳴き声を「南無妙法蓮華經」というお題目に見立てた《猫の恋図》(作品9)も同様の趣向といえるでしょう。

いずれの作品も仏道修行の厳しさを伝えるものではあります、愛らしい動物の姿に託すというユーモラスな手法を用いることで、私たちの心の中にも自然と

入ってくるような気がします。

3章 凝縮された遊びと笑い

本章で紹介するのは、《異代同戯図巻》(作品10)。時代や地域の異なる人物や動物が場を同じくして共に戯れる様子を描いたもので、日本美術で用いられる遊びや笑いのテクニックが詰まった作品です。それでは、具体的にどのようなテクニックが用いられているのでしょうか?いくつか見てみるとよろしく。

初級編：擬人化

羽子板に興じるサルや雅楽を演奏するカエルなど、動物たちがあたかも人間のように振舞っています。着想のユニークさもさることながら、小動物が戯れる姿に思わず頬が緩んでしまいます。特別な知識を持っていなくても十分に楽しめる、初心者向けの笑いの手法といえます。

中級編：パロディー

祈りの対象である神仏が遊戯や曲芸に興じていたり、超人的なパワーを持っているはずの仙人がその力を発揮できずに困惑している様子が描かれています。これは、本来の姿と画中の姿とのギャップを楽しむもの。

元ネタを知っている方が面白いことは間違いないありませんが、慈悲深い観音様が銃を構えていたり、甲冑に身を固めた韋馱天が厭あげに興じていたりするのは、理屈抜きに笑ってしまいそうです。知らなくても楽しめるけれど、知識があるとより面白い。その意味では中級者向けの笑いの手法といってよいでしょう。

上級編：ありえない!

所々に酒宴や行列の様子が描かれます。実は、ここに登場する人物は活躍した時代や地域が異なっており、一堂に会することはありえないのです。ただ、構図やとりあわせにひねりがあるわけではないので、腹を抱えて笑うということはありませんし、そもそも、登場人物が何者なのかが分からなければ楽しむことはできません。登場人物の元ネタをクイズのように面白がったり、往年のスターたちの時空を越えた共演に胸をアツくしたり、といった楽しみ方をされたと想像されます。

ともあれ、楽しむためにはそれなりの知識を必要とする、上級者向けの手法であることは確かでしょう。本画巻に登場する神仏や仙人の元ネタともいえる、本

來の姿を良く伝える作品も併せて紹介します(作品11~21)。見比べてみてそのギャップをお楽しみください。

4章 あふれる遊び心

遊び心はこれまで見てきた絵画だけでなく日常で用いる生活用具にも發揮されます。特に客人の心を楽しませるなどを旨とする茶の湯に用いられる茶道具のデザインには様々な工夫が凝らされました。例えば、作品22、23は香を焚くための香炉と香合ですが、動物をあしらったかわいらしい姿が特徴です。特に《織部木菴香炉》(作品22)は、耳(羽角といいます)に煙孔を開けた秀逸なデザインで、実際に香を焚いた様子を想像してみると思わず笑みがこぼれてしまいそうです。

また、桃山時代に活躍した武将であった古田織部は日本の歴史の中で最も遊び心にあふれた茶人の一人。《織部省茶碗 銘「浜千鳥」》(作品24)はそんな織部の好みにかなう茶碗です。この茶碗でお茶を出された客人は、まずどこを持てばよいのか迷うほどにぐりやりとゆがんだ姿に驚かされます。その後茶を飲み干すと、内側(見込み)に刻まれた鳥の足跡のような可愛らしい模様が姿を現します。お堅い客人であっても思わずんまりしてしまうこと間違いなしの遊び心あふれる演出です。こうした遊び心は江戸時代の茶道具にも継承されます(作品25)。

5章 仙厓さんネタ祭り

さて、遊びと笑いをテーマにした本展のトリを飾る作家として仙厓さん以上に相応しい人はいないでしょう。本章では当館が誇る仙厓コレクションの中から珠玉のネタを4点ご紹介いたします。心ゆくまでご堪能下さい。

究極の自虐：老人六歌仙図屏風(作品26)

六人の老人を描いた作品です。贊では「しづがよるほくろが出来る腰曲がる」「氣短になる愚痴になる」など、加齢による身体的衰えや心の変化を綴っており、その内容はなかなかに厳しいものです。漫談家の綾小路きみまささんはびっくりの毒舌ぶりですが、仙厓さんはこの作品を通して老人を揶揄したかったわけではありません。なぜなら、仙厓さん自身も老人だったから。日頃自身のことを「猿の日干し」と自虐的に語っていた仙厓さんなりの、同世代の人びとへのエールと捉えるべきでしょう。

不謹慎すぎる：南泉斬猫図(作品27)

僧侶が修行に励んでいたある日のこと。お寺の中にどこからともなくネコがやってきました。そこで、王老師なる師匠が一言。「お前たち、何かこのネコについて気の利いたことをいってみろ。さもなくばネコを斬る。」突然始まった戦慄の大喜利大会に戸惑う弟子たち。結局、即答できたものはおらず、ネコは斬り捨

てられてしまったのです。非常にショッキングな逸話ですが、殺生を扱っていることもあり、禅問答の定番のお題になっていました。さて、肝心の仙厓さんの答えはというと、「ネコだけでなく、その場にいた僧侶たち、王老師もまとめて斬ってやる」というもの。発言の過激さもさることながら、画中の僧侶たちをマンガのキャラクターのようにデフォルメしているのも不謹慎だと怒られてしまいそうです。本作を通して仙厓さんが目指したのは禅僧たちの常識をぶち壊すということ。その為に笑いという手段を用いて尊敬すべき先達たちを厳しく攻撃して見せているのです。

ダジャレからの深い話：五徳図(作品28)

輪っかの上に3本の爪。釜などに火をかけるために用いる五徳の絵です。贊によれば、五徳は「如く」と音が通じており、「かくの如く(このようにありたい)」と願う心を象徴する存在であるといいます。ただのダジャレにも思えますが、仙厓さんはさらにこう続けます。「仏教では悟りを開いた仏と迷いの世界にある衆生を区別するが、心が仏を造り、また、衆生をも造るという意味においては心と仏と衆生とは同一である」と。何気ない日用品を通して仏教の心理を伝える、仙厓さんの真骨頂ともいえる作品です。仙厓さんからこの絵をもらった人は自宅に飾り、家族に対してダジャレを交えて心のありようの大手さを熱く語ったことでしょう。

ネタ渋滞：すす玉名人図(作品29)

大道芸人がジャグリングをしているようですが、なんだか様子が変です。というか、あまりにもツッコミどころが多すぎて完全にネタが渋滞しています。全部拾うのはさすがに無理なので分かりやすいところだけツッコミを入れておきましょう。

①投げているものが多すぎる。
②神様や生き物などありえないものを投げている。
③地面に色々なものが転がっていてそもそもキャッチするつもりもなさそう。
などです。とにかくありえない尽くしの作品ですが、笑いを通して真理を伝えるのは仙厓さんの得意技です。きっとこの作品にも隠れたメッセージが込められているはず…、なのですが、いくら考えても私には一向に思い当たりません。ひょっとして、ただ絵を見て笑ってほしかっただけなのでは?最近はそのように考えるようになりました。

というのも、仙厓さんは年齢を重ねるにつれてその作品が親しみやすさを増し、説明的な要素も省略されていくという傾向があります。想像するに、禅の神髄を伝えるという目的を達成するための手段として、余計なことを考えずにただ笑う、というのが有効なアプローチであると考えるに至ったのではないでしょうか。